# 經濟論叢

第八十四巻　第六號

故名誉教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿
統計学＝社会科学的認識手段論の問題点……大橋隆憲　1
資本主義の運動法則における論理的なものと歴史的なもの(二)…吉村達次　17
急速税務減価償却をめぐる所得税会計の保守主義……高寺貞男　37
ヘンリ・ジョージについての一考察…北沢康男　55
ソースタイン・ヴェブレンに関する一研究……中山大　68
神戸正雄先生による再保険特約方式の輸入……佐波宣平　85
記事
神戸先生御逝去……91
追憶文……96
新村出　井藤半弥　本庄栄治郎　小島昌太郎
石川興二　嵯川虎三　大谷政敬　小山田小七
堀江保蔵　島恭彦　松井清

昭和三十四年十二月

京都大學經濟學會

# 神戸先生の学部愛

石川興二

先生の御逝去を報じた「学園新聞」（十月十九日附）に、先生の思い出の一端を述べた私は、ここには日頃特に感じていた先生の学部に対する愛の深さについて書きたいと思う。

晩年の先生は唯一人の長老として経済学部を「いへ」の様に愛しておられたので、先生の突然の御死去を知った時、学部の慈父を失った思いをしたことは、私だけではなかったであろう。

終戦後経済学部を構成していた諸教授が、突然大学を去ってばらばらになり、新に学部を構成した諸教授との連絡もなくなっていた時、東京より京都に帰って来られた神戸先生が、新旧の総ての教授を都ホテルに招待された。このことにより、学部の人的連絡が再び出来てきた。この御招待は、毎春都ホテルや「つるや」で繰り返えされ、学部の人の和は加わって行った。また先生が、御老齢にかかわらず寒い十一月の経済学会総会に出席され、若い人々と並んで木の冷い腰掛にかけて研究報告を熱

心に聴いて居られるのを、同席して見た私は、学部に対する先生の深い学問的関心にうたれたのであった。昨年春総会が清風荘の芝生の上で催された時にも、先生は御元気に有益なお話をして下さった。優秀な学術論文に賞金として毎年五万円を学部に提出することを計画された先生は、選考上の困難があったので、改めて五十万円を経済学会に寄付された。これらのことからも、先生が如何に我経済学部の人の和と学問的精進を念願して居られたかを知ることが出来るのである。

今年五月二十三日の経済学部四十周年の祝典には、先生は学部創立当時の教授で御存命な唯だ一人として八十二歳の御高齢で御元気に出席して下さった。その翌日には、大正十五年卒業の教え子の招待をよろこばれて、本庄、小島、小生の三人と共に奈良へドライブされ、自動車を降りて御元気に徒歩で春日神社に参拝され、記念写真の後奥山の日月亭で宴会に興ぜられ、京都へドライブして帰られた。そこに私は、先生の子弟愛の深さを目のあたり見たのである。大正六年大学入学以来の永い間の私に対する先生の子弟愛のいろいろな思い出については、残念ながらここに書く余白がかない。

きけば、その後二三日して発熱された先生は、胆石病で入院されたが、突然脳溢血で逝かれたのであった。かくて先生は「いへ」として愛しておられた経済学部の四十周年を祝し、その発展を念願しながら逝かれたのである。



前述した「学園新聞」に、「三K」と云うことは当時の学部において進歩的であった神戸、河上、河田三教授を意味したと書いてあるが、先生の御性格は、進歩的であったが、寛容であった。故に先生の門下よりは、左翼的な人のみでなく多方面の人材が出たのである。先生は三人のお子様の総てを失われ奥様も亡くなされたが、忍耐強く平静に研究をつづけられ、文化功労賞も受けられた。先生はまた常に簡素な生活を楽しまれた。晩年に吉田の立派な御住家を処分されて河原町の親戚の三階に生活されたのもその一例である。先生の八十歳をお祝いした論文集の巻頭に「求道忘我　八十翁神戸正雄」と書かれたが、この「求道忘我」こそ先生の生涯の原動力であった。

この偉大な先生を失った私共は、今更に先生の慈父としての恩愛に感銘すると共に先生の御精神に学んで経済学部の発展に努力しなければならない。今日の世界の冷戦状態の根本原因は、二百年前に成れるスミス的原理と百年前に成れるマルクス的原理とに各が固執しこれを著しく変化した今日の世界に適用せんとする両経済学派の冷戦状態にある。我々は先生の進歩的精神に学んで、この冷戦を越て今日の世界的事実に即して今日の世界史的課題を把握し、この解決のために先生の和を重んずる愛に学んで協力し、古い抽象的原理を止揚し新な具体的原理を確立し、この上に先生の努力精進の精神に学んで今日の経済学を創造しなければならない。これが今日の経済学者の任務である。